

## 授業実践のひろば

# ライフストーリーの語りを取り入れた生活設計の授業

— 男女共同参画意識を高めるための試み —

仲田 郁子

千葉県立流山おおたかの森高等学校

日本家庭科教育学会誌, 62(1): 38-42, 2019

## 1. はじめに

これまで筆者らは、高校生に必要なだと考えられる生活設計の指導内容について検討を重ねてきた(仲田・久保, 2012, 久保・仲田, 2013)。その中で、多くの高校生が、妻は結婚や出産で退職することが普通で最も一般的だと捉えており、高校生においても固定的な性別役割分業観が根強いことが明らかになっている。

例えば、筆者らが2012年に実施した高校生の意識調査によれば、「女性は子どもが小さいうちは、職業を持たずに家にいるのが望ましい」という考え方について、「やや思う」と「かなりそう思う」と答えた高校生は80%を超えている(仲田他, 2015)(図1)。

男女共同参画社会を実現するためには、固定的な性別役割分業を見直し、家庭も社会も男女が共に支え合う意識を育成することが必要である。

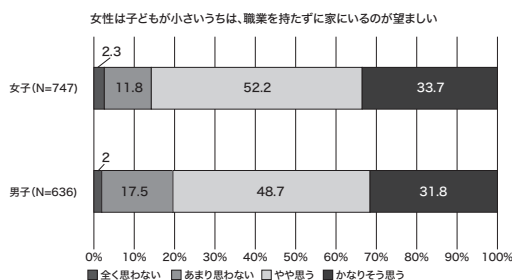


図1 千葉県の高校生を対象とした「男女共同参画社会に関する高校生の意識調査」(2012年より)

(受付日 2018年9月28日/受理日 2019年11月3日)  
Ikuko NAKADA  
〒270-0122 千葉県流山市大群275-5

高等学校家庭科においても、その理解を深められるような働きかけが重要であると考えられるが、社会に巣立つ前の段階にある高校生にとって、「男女共同参画」とは具体的にどのような状態や行動を示すのかについて、自分自身の生活経験から導き出すことは容易なことではない。

そこで、生活設計の授業において、男女共同参画社会について生徒が具体的に理解を深められる方法の一つとして、外部講師を招き、男女共同参画の視点からライフストーリーを語ってもらう授業を試みた。

## 2. 授業実践

### (1) 背景

これまでの筆者らの研究の中でも、特に2012年に高校生を対象に実施した調査からは、母親が仕事を継続するライフコースをとっている場合、女子生徒の「女性の職業参加への肯定的意識」が高く、母親の生き方は、女子にとってロールモデルとなっていることがうかがえた。また「家族全員が協力して家事を行っている」場合には、男女ともに「男性の家事・育児に肯定的な意識」を示すこともわかった。このように、生徒の家庭環境は男女共同参画意識に大きく影響を与えており、家庭科の授業を通して生徒の視野を広げ、多様な生き方に気付かせる必要があると考えられる。

これらの調査結果から、筆者らは、高等学校の家庭科教育において、高校生の男女共同参画意識を育むための学習内容として、図2のような3つの内容を提案している。すなわちA：ライフデザ

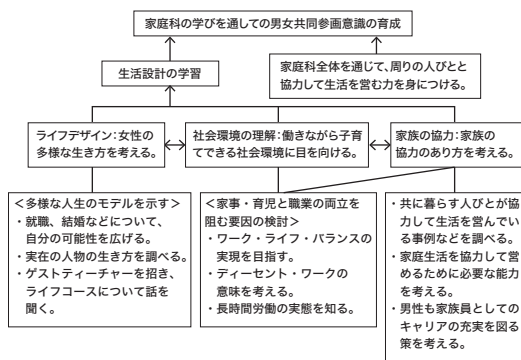


図2 男女共同参画意識を育む生活設計の授業の概念図

インとして、女性の多様な生き方を考えること、B：社会環境の理解として、働きながら子育てできる社会環境に目を向けること、C：家族の協力のあり方を考えることの3点である。特にAについては、母親の生き方が女子生徒のロールモデルとなっていることが伺えるため、多様な生き方を知ることが重要であると考えられる。そこで、Aに関わる内容として、今回の授業を実施することにした。

(2) 生徒の様子

本実践報告は、筆者の前任校でのものである。前任校は流山市南部に位置する全日制普通科の男女共学校で、明るくまじめに学習に取り組む生徒が多く、部活動が盛んである。

家庭科の必修科目は生活デザインで、実施は2015年2月、対象は1年生7クラスである。

(3) 授業計画

生活設計の授業の流れは表1のとおりである。最初に「人生すごろく」を作成し、生徒の作成し

表1 生活設計の授業の流れ

指導内容	実施時数
導入, リスクとすごろく作成の説明	1
すごろく作成	3
すごろく鑑賞とリスクの共有	1
生活資源と生活保障制度	1
家庭経済と家計	1
ライフコース別家計シミュレーション	2
男女共同参画社会とライフコース (本授業)	2
合計	11

たすごろくの内容を振り返りながら、人生におけるリスクと生活資源の活用、わが国の社会保障制度について理解し、その後経済シミュレーションを行って、家計管理の特徴などについて学習を進めた。その後本授業である「男女共同参画社会とライフコース」を実施した。

講師は地元市役所の男女共同参画室に依頼し、地域で男女共同参画社会づくりの活動をしているNPOのメンバー2名を紹介していただいた。本時のねらいは、生活設計のまとめとして、多くの生徒が持っている固定的な性別役割分業意識に気付かせ、それらにとらわれずに自分の人生を大事に生きることを考えさせることとした。講師とは事前に打ち合わせを行い、生活設計の学習であることを確認した上で、前時までの授業の流れを伝え、固定的な性別役割分業意識にとらわれずに自分の人生を大事に生きることを伝えてほしいこと、そしてわかりやすく具体的な事例を入れて欲しいことをお願いした。その上で、今回は就労と家事労働、さらに自分らしく生きることにポイントを絞ることとし、具体的な授業の進め方は講師に任せた。

(4) 授業の流れ

本授業の流れは表2, 3の通りである。2時間続きで、まず1時間目はAさんに自己紹介していただいた後、男女共同参画に関する意識調査を行い、その結果をもとにグループ協議を行った(写真1)。調査票は、大学女性協会が作成したものをそのまま用いた(写真2)。グループ協議により生徒の男女共同参画社会に対する意識が高まっ

表2 本時の流れ (1時間目)

担当	時間(分)	学習活動
教諭	5	本時の内容の説明を聞く。
Aさん	10	挨拶, 講師の自己紹介を聞く。導入: 「男女共同参画」の意味を知る。
	5	男女平等意識に関するアンケートに答える。くじ引きで班編成をし、グループごとに着席する。
	15	アンケート項目に従い、班ごとに与えられたテーマについて、グループ協議を行う。
	15	話し合った内容を発表する。(1班2分程度)

表3 本時の流れ（2時間目）

担当	時間(分)	学 習 活 動
Aさん	20	Aさんのライフストーリーと合わせて、解説を聞く。 ① M字カーブの意味と国際比較 ② 父母の帰宅時刻 ③ 子育て期にある男性の家事・育児時間 ④ 共働き世帯数の推移 など Aさんからのメッセージを聞く。
Bさん	20	挨拶、ライフストーリーを聞く。 Bさんからのメッセージを聞く。
Aさん Bさん 教 諭	10	終了の挨拶



写真1 グループ協議の内容を発表する生徒



写真2 質問紙

ところで、2時間目には、男女共同参画社会の意義とわが国の現状について、Aさんにライフストーリーを織り交ぜながら講義をしてもらった。

現在70代のAさんのライフストーリーの概略は次の通りである。

幼少期に父親が病気で亡くなり、母親が専業主婦だったこともあり経済的に困窮した。父の病死により人生が大きく変わってしまった経験から、自分は結婚しても働き続けようと思っていたが、そのための選択肢としては、当時は公務員しかなかった。平等だと思った公務員の社会も、仕事の内容、昇進などで大きな差別があったが、一つ一つ乗り越えた。

Aさんは、自分らしく生きるために、それを阻害する社会と闘い、障害を乗り越えて、思いを実現した方だと言える。グループ協議中も、その後の解説の中でも、Aさんのライフストーリーが継続的に語られ、生徒は具体的なイメージを持つことができたようだった。

続いてBさんが登場し、自己紹介に続けてこれまでのライフストーリーが語られた。Bさんは、40代である。高校時代は美術部で活躍し、卒業後は美術系短大へ進学した。卒業後、大手メーカーに就職し、ほどなく結婚退職した。その後DVが原因で離婚し、子どもはいない。数年後にBさんは再婚し、夫は絵の仕事を応援してくれ、現在地元を中心にイラストレーターとして活躍中である。Bさんには常に「絵が大好き」という思いがあり、困難に直面しても自分の人生をあきらめず、前向きに人生を切り開いてきた。Bさんは、誰もが自分らしく生きられる社会こそが「男女共同参画社会」だと思うと語り、話を締めくくった。

二人の語りには、人生におけるリスクとその対策としての生活資源、職場におけるさまざまな慣習、固定的な性別役割分業にしばられることの不都合さ、さらに自分らしく生きることの大切さなど、男女共同参画の意味を、生徒が実感を持って捉えられる具体的なエピソードが盛り込まれていたと考えられる。

### 3. 生徒の感想とまとめ

授業実践後、生徒の振り返りの記述、感想などから、授業の効果を検討した。

まず、Aさんに対する男子生徒の感想では、「体験談から、働くことがどういうことなのかわかった」や、「これまで考えたことがなかったが、女の人がどんなことを考えているのか、真剣に考えることができた」など、働くということや女性の気持ちに関わることが多く見られた。

女子生徒の感想では、「日本のM字カーブが、世界ではそうではないことに驚いた」や、「(会社で)女性でもちゃんと働けることがわかった」など、やはり働くことに関するものが多く、また「学校では男女差はないが、社会ではまだあると思った」など、男女差別に関することも見られた。男女ともに「これまでこういうことを考えたことがなかった」という記述が目立った。

Bさんに対する生徒の感想では、男子は、「自分らしく、自分の人生を大切にしていきたい」、「人生何があるかわからないが、自分も前向きに生きていこうと思った」など自分らしく生きることについてのコメントが目立った。「これが家庭科なのか」と、ライフコースの学習の意味を実感できた生徒もいた。

女子は、「『自分らしく』とは簡単そうで意外とむずかしいことだと思う」、「自分のやりたいことを楽しんでいる姿を見て、私もそうしたいと思った」など、大変なことがあっても自分らしく前向きに生きる様子に感動したというものが多く見られた。

以上をまとめると、講師の話聞いて、これまでこのようなことを考えたことがなかったが、社会の状況に目を向けることができ、働くことについて考えられたこと、そしていろいろな人生があるが、自分らしく生きられる社会を作ることの大切さに気付いたこと、体験談を聞いて身近に感じられたことなどが挙げられる。

このように、男女共同参画社会への理解を深めることをねらいとして、外部講師のライフストーリーの語りを取り入れた授業を試み、講師に実体験を具体的に語ってもらった結果、「男女共同参画」という抽象度の高い概念を、生活の具体的事象のレベルに下ろして理解させることができた。

男女共同参画に関する法律や、現実の性別役割分業の実態などのデータを示すことも重要であるが、ライフストーリーの語りから、生徒が男女共同参画の意味を実感できることが明らかになり、また具体的に理解をしたことにより、社会へ目を向けて考えることの重要性も理解することができ、今回の取り組みの効果が示された。授業の効果についてまとめたものが図3である。

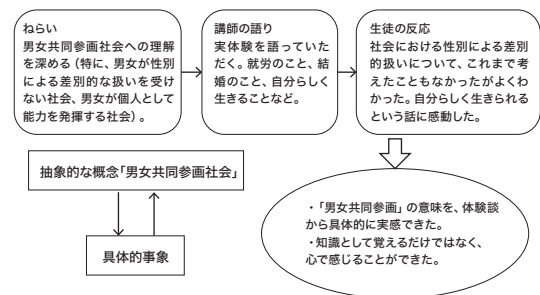


図3 授業効果の検証

生活設計を構成する領域は、藤田(2001)によれば、大きく分けて①将来どういう生活を送りたいかを考えるライフデザインの領域、②金銭やネットワークなどの生活資源を確認し、必要な行動を考える生活資源とその管理の領域、③リスクを確認し対策を行う生活リスクとその管理の領域の3つに分けることができ、それぞれの領域は密接に関係しあっていると考えられる。

筆者らは、この考え方に基づいて生活設計の指導について研究を続けているが、今回の実践における2つのライフストーリーをあてはめてみると、①のライフデザインの領域としては、Aさんが公務員を志したことや、Bさんが絵が大好きであったことなどがある。②の生活資源の領域では、Aさんが働き続けられる職業を得たこと、Bさんは応援してくれた家族の存在、特技などがあり、③のリスクとその管理の領域では、Aさんは父親の死去、それに伴う経済的困窮、Bさんは家族のDV、離婚などがある。今回の実践は、生徒が積極的な感想を述べていることから、これら3つの領域を関連させて指導することの有効性も示していると考えられる。

#### 4. 今後の課題

今回は講師が女性二人だったので、男性側からの男女共同参画の語りをぜひ取り上げたいと考えている。また授業のまとめとして感想を書かせたが、今後はこれら生徒の声を活かし次の授業でクラスにフィードバックして、そこからさらに思考を深めさせたい。

##### <謝辞>

本実践にあたり、授業にご協力いただきその講話の本誌への掲載をご快諾いただいた講師のAさん・Bさん、および授業全般についてご指導いただいた千葉大学教育学部久保桂子先生に心より感謝申し上げます。

##### 参考文献

- 大学女性協会. (2014). ジェンダー平等の視点から家庭科教育を考える. 東京, 大学女性協会.
- 藤田由紀子. (2001). リスクと生活設計. 御船美智子, 上村協子 (編), 現代社会の生活経営. (pp.49-61). 東京: 光生館.
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2010). 第14回出生動向基本調査 (夫婦調査).
- 厚生労働省 (2012). 第1回21世紀出生児縦断調査 (平成22年出生児) の概況 <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/shusshoujib/01/index.html>
- 久保桂子・仲田郁子. (2013). 女子高校生の生活設計における職業についての意識. 千葉大学教育学部研究紀要, 61, 365-371.
- 文部科学省. (2009). 高等学校学習指導要領.
- 文部科学省. (2010). 高等学校学習指導要領解説家庭編.
- 仲田郁子・久保桂子. (2012). 高校生の生活設計への積極的態度に影響を及ぼす要因と指導法の検討. 日本家庭科教育学会誌, 55(1), 25-32.
- 仲田郁子・久保桂子・石井美穂. (2015). 高校生の男女共同参画意識にみる家庭科教育の課題—生活設計領域の学習を中心に—. 日本家庭科教育学会誌, 58(4), 222-231.